

目的 乳児の発する喃語が6ヵ月頃から成人の音声パターンに類似してくるということは、育児者の音声が発声に影響を与えている可能性を示すものと考えられる(村井1970)。本研究はこの点に注目し、乳幼児の言語発達の様相と、育児者のかかわり方を断片的に把握し、乳幼児の言語習得のメカニズムを明らかにしようとするものである。

本報では、生後6ヵ月児とその母親を対象に、育児者が乳児の叫喚発声及び非叫喚発声にどのような態度を示すかを分析し、育児者の役割について検討することを目的とした。

方法 対象：核家族の第一子で、主な育児者が母親であるM.M.(男児、6ヵ月時の発達指数113)とその母親(Y-G性格検査AD型)。資料：生後6ヵ月目の自宅居間に於ける非統制日常場面で示されるM.M.の行動をVTRと観察者の筆記により1時間記録し、後にビデオタイマーで1/100秒単位の経過時刻表示を付加した。今回は、録画テープの再生及び観察筆記録に基づいてM.M.の発声及び行動と、それに対する母親の応答場面を文字化(M.M.の発声は片仮名、母親の発語は平仮名で転記)したものと用いた。

結果 M.M.の発声頻数と母親の応答状況 M.M.の発声は叫喚46回、非叫喚71回生起したが、このうち母親が音声で即時応答した状況は叫喚発声に対して80.4%、非叫喚発声には56.3%と、前者に対する反応の方がより多く行われていた。母親の応答の特徴 叫喚発声に対しては11種類の応答がなされたが、中でも最も多いのが問い返しと批判で21.6%の同年、次いで指示・命令、かけ声が共に10.8%であった。非叫喚発声には確認とかけ声がいずれも25%で最も多く、反復模倣が12.5%で続くなど、極めて受容的な態度が認められた。